

UCCD-9185/6

Immortal Backhaus 1000

DECCA



Wilhelm Backhaus

SEIN LETZTES KONZERT

バックハウス/最後の演奏会

WILHELM BACKHAUS/SEIN LETZTES KONZERT

●CD 1 (UCCD-9185) (1969年6月26日の演奏会)

ベートーヴェン

BEETHOVEN (1770-1827)

ピアノ・ソナタ 第21番 ハ長調、Op.53「ワルトシュタイン」

PIANO SONATA NO.21 IN C MAJOR, Op.53 "WALDSTEIN"

- ① 第1楽章: アレグロ・コン・ブリオ 1st Mov.: Allegro con brio — 11:18
- ② 第2楽章: 序奏(モルト・アダージョ) 2nd Mov.: Introduzione (Molto adagio) — 3:06
- ③ ーロンド(アレグロ・モデラート・プレスティッシモ) — 9:33
- Rondo (Allegro Moderato - Prestissimo)

シューベルト: 楽興の時、D.780 (Op.94)

SCHUBERT (1797-1828): MOMENTS MUSICAUX, D.780 (Op.94)

- ④ 第1番 ハ長調 No.1 in C Major — 3:21
- ⑤ 第2番 変イ長調 No.2 in A Flat Major — 5:31
- ⑥ 第3番 ヘ短調 No.3 in F Minor — 1:39
- ⑦ 第4番 嬰ハ短調 No.4 in C Sharp Minor — 4:24
- ⑧ 第5番 ヘ短調 No.5 in F Minor — 2:13
- ⑨ 第6番 変イ長調 No.6 in A Flat Major — 5:14

モーツァルト MOZART (1756-1791)

ピアノ・ソナタ 第11番 イ長調、K.331 (K.300i) 「トルコ行進曲つき」

PIANO SONATA NO.11 IN A MAJOR, K.331 (K.300i) "ALLA TURCA"

- ⑩ 第1楽章: アンダンテ・グラツィオーソ 1st Mov.: Andante grazioso — 7:40
 - ⑪ 第2楽章: メヌエット 2nd Mov.: Menuetto — 4:35
 - ⑫ 第3楽章: トルコ行進曲(アレグレット) 3rd Mov.: Alla turca (Allegretto) — 3:08
- ⑬ シューベルト: 即興曲 変イ長調、D.935-2 (Op.142-2) — 4:30
SCHUBERT: IMPROMPTU IN A FLAT MAJOR, D.935-2 (Op.142-2)

●CD 2 (UCCD-9186) (1969年6月28日の演奏会)

ベートーヴェン BEETHOVEN

ピアノ・ソナタ 第18番 変ホ長調、Op.31-3より(第4楽章を除く)

PIANO SONATA NO.18 IN E FLAT MAJOR, Op.31-3 (except 4th Mov.)

- ① 第1楽章: アレグロ 1st Mov.: Allegro — 6:44
- ② 第2楽章: スケルツォ(アレグロ・ヴィヴァーチェ) 2nd Mov.: Scherzo (Allegro vivace) — 3:47
- ③ 第3楽章: メヌエット(モデラート・エ・グラツィオーソ) 3rd Mov.: Menuetto (Moderato e grazioso) — 2:43

シューマン: 幻想小曲集、Op.12より

SCHUMANN (1810-1856) FANTASIESTÜCKE, Op.12

- ④ 第1曲: タベに No.1: Das Abends — 4:25
 - ⑤ 第3曲: 何故に? No.3: Warum? — 2:47
- ⑥ シューベルト: 即興曲 変イ長調、D.935-2 (Op.142-2) — 4:51
SCHUBERT: IMPROMPTU IN A FLAT MAJOR, D.935-2 (Op.142-2)

ヴィルヘルム・バックハウス(ピアノ)

WILHELM BACKHAUS (Piano)

●ピアノ・ソナタ 第21番 ハ長調、Op.53
「ワルトシュタイン」(ベートーヴェン)

ベートーヴェンは全部で32曲(番号のついていないものが他に数曲ある)のピアノ・ソナタを残しているが、その中で創作中期の特徴といえる、燃えるような激しい感情と、寸分の隙もない音楽的構成の一致において、ベートーヴェンの最高傑作の一つに数えられ、同時に彼らしい雄渾な音楽とその標題から、最もポピュラーなものの一つとなっているのが、この《ワルトシュタイン》である。

このピアノ・ソナタの《ワルトシュタイン》という呼称は、これが献呈された伯爵の名前に由来している。ワルトシュタイン伯爵は、ボン時代からベートーヴェンの才能に注目し、彼をウィーンに出してやった最大の功労者であった。そしてウィーンにおいては、このホヘミア出身の貴族の紹介状が大いにものをいい、ベートーヴェンが貴族社会に知己を得ることに、たいそう役立ったのである。そのため、ベートーヴェンは終生この伯爵への感謝を忘れなかった。この中期の最高傑作の一つとされるソナタが伯爵に捧げられたのも、ベートーヴェンのそうした気持の表われだったのである。

作曲は第3交響曲《英雄》と同じ頃、つまり1803年に着想され、1804年に完成している。すなわち、これこそまさに充実期にさしかかっていた頃の意欲作といえ、実際ベートーヴェンはこのソナタで、新しい境地を切り拓いたのである。1800年から翌年にかけて作曲された作品27の2曲のソナタで、幻想風ソナタという実験を試み、次いで作品31の3曲のソナタではドラマティックな表現様式の可能性を迫ったベートーヴェンは、それらを統合した書法をこのソナタで実現したのである。

ところで、1804年に完成された時点でのこのソナタは、第2楽章にアンダンテの音楽を置く3楽章構成だった。しかしベートーヴェンはその後、全体の構成から見てそのアンダンテ楽章が長すぎると感じさせると考え(これには友人の忠告もあったといわれている)、1805年に出版される時には、そのアンダンテを取り除き、もとの第3楽章への導入部として、現在のモルト・アダージョを置いて、より密度の高い曲としたのである。結果としてこのソナタは、2楽章構成となった。ちなみに取り除かれたアンダンテ楽章は、独立した曲《アンダンテ・ファヴァリ》として1806年に出版されている。

第1楽章：アレグロ・コン・ブリオ ハ長調、 $\frac{4}{4}$ 拍子、ソナタ形式。

第2楽章：モルト・アダージョ ヘ長調、 $\frac{9}{8}$ 拍子、3部形式(導入部)～アレグロ・モデラート ハ長調、 $\frac{4}{4}$ 拍子、ロンド形式(主部)。

●楽興の時、D.780 (Op.94)(シューベルト)

偉大な先輩であるベートーヴェンを尊敬してやまなかったシューベルトは、ピアノ曲の分野では早くからソナタの作曲を試みていた。しかし、彼のピアノ・ソナタはベートーヴェンのそれと違って、いわば取るに足らないような動機を展開して行くソナタ形式に不可欠の手法に欠けており、ベートーヴェンのような動機操作はほとんど行なわれていない。しかしシューベルトのソナタが劣っている、というわけではもちろんない。すなわちそこには、ベートーヴェンとは違った展開法があるからであって、それはまず美しい旋律を生み出し、それを雄弁な転調法の中で生き生きと歌わせるということである。この独自の手法は、形式の拘束を受けるソナタより、自由に楽想を発展できる小品でいっそう美しく発揮されるといえるだろう。

その意味で、シューベルトのほとんど晩年、といっても20歳代後半の1823年から30歳を越えたばかりの1827年までの間に作曲されたとされる6曲からなる《楽興の時》は、彼の天才が縦横に発揮された傑作で、最晩年に作曲された各4曲からなる2組の《即興曲集》とともに、最も彼らしいピアノ曲といえよう。そしてこれらは、のちのロマン派のピアノ音楽の一つの特徴となる性格的小品の先駆けとなったのである。

この《楽興の時》は彼の《即興曲》に較べると、いくらか規模は小さいのだが、楽想や構成には、むしろ《即興曲》よりも一段と軽快な即興性が認められる。その意味でシューベルトはこれら6曲を、晩年の《即興曲集》に先駆けて即興曲として作曲したのではないかとも思われる。なぜなら《楽興の時》というタイトルはシューベルト自身がつけたのではなく、1828年の出版に際して出版社がつけたものだからである。しかしシューベルトはそのタイトルが大いに気に入ったらしい。なお作曲年代は、自筆譜が失われていることから定かではないために、一応1823年から1827年の間とされているが、第3番が1823年、第6番が1824年、そして残りの4曲が1827年と

もいわれている。

第1番 長調：モデラート $\frac{3}{4}$ 拍子、複合3部形式を基本とした自由な形式。

第2番 変イ長調：アンダンティーノ $\frac{9}{8}$ 拍子、ABA'B'A'という形式。

第3番 短調：アレグロ・モデラート $\frac{3}{4}$ 拍子、自由な3部形式。

第4番 嬰ハ短調：モデラート $\frac{3}{4}$ 拍子、3部形式。

第5番 短調：アレグロ・ヴィヴァーチェ $\frac{3}{4}$ 拍子、3部形式。

第6番 変イ長調：アレグレット $\frac{3}{4}$ 拍子、3部形式。

●**ピアノ・ソナタ 第11番 イ長調、K.331 (K.300b)「トルコ行進曲つき」**(モーツァルト)

モーツァルトのピアノ・ソナタは、現在一般的に18曲が知られているが、その中で最も広く知られ、最も高い人気を得ているのは、おそらくこの第11番だろう。しかしこのソナタは、いわゆる古典派のソナタの概念からは少しはずれた特異な、というか変則的な作品である。すなわちこのソナタは、三つの楽章からなるものの、一般的には第1楽章がソナタ形式をとるところを、このソナタではそうでないばかりか、あとの二つの楽章にもソナ

タ形式が用いられていない。つまり、まったくソナタ形式の楽章を持たないピアノ・ソナタなのである。また調性についても少し変わっていて、普通第2楽章は、第1楽章でとられた調性の属調あるいは平行調を主調として書かれるのだが、ここでは三つの楽章すべてが同じ調性を主体として書かれている。こうした特徴は、外面的に限って見るならば、古い組曲に通じる要素といえることができる。しかしその音楽は、古典的な端正さと優雅な美しさに満ちていて、モーツァルトならではの魅力にあふれており、人々から愛されることもうなずけるものである。

さてこのソナタは、第10番、第12番とともに1784年にウィーンのアルタリア社から出版されており、これまで1778年にパリで作曲されたと考えられてきたのだが、近年の自筆譜の研究により、作曲時期は1781—1783年とされるようになった。作曲場所もミュンヘンまたはウィーンと訂正されている。

1780年11月、モーツァルトはザルツブルクを出発してミュンヘンに赴き、翌年1月末に歌劇《イドメネオ》を初演、3月には同地を離れて最終的にウィーンに定住することになる。このソナタは4ヵ月半ほどのミュンヘン

滞在中、もしくはウィーンに移ってからの初期に書かれたことになる。ウィーン時代初期には歌劇《後宮からの逃走》が作曲されているが、当時ヨーロッパ全土で人気を博していたトルコ趣味を取り入れたという点で、第3楽章に〈トルコ風に〉と書かれた音楽を置いたこのソナタと、《後宮からの逃走》は軌を同じくしている。

第1楽章：アンダンテ・グラツィオーソ イ長調、 $\frac{9}{8}$ 拍子、変奏曲形式。主題と六つの変奏からなる。

第2楽章：メヌエット イ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子、3部形式。

第3楽章：トルコ行進曲 (アレグレット) イ短調、 $\frac{3}{4}$ 拍子、ロンド形式。

●**即興曲 変イ長調、D.935-2 (Op.142-2)**
(シューベルト)

前述のように、シューベルトが死の前年に書き上げた2組の《即興曲集》は、最もシューベルトらしいピアノ曲の代表である。ただし即興曲とはいっても、本当に即興で作曲されたわけではなく、即興的な性格の曲という意味の小品である。2組は4曲ずつまとめて、作品90および作品142として出版されたが、作品142のほうは曲順やそれぞれの曲の性格か

ら見て、一つのソナタとして書かれたという説もある。それを《即興曲集》として出版したのは、小品のほうが売れやすいと考えたためかも知れない。いずれにしても個々に楽しめる美しい曲ばかりである。作品142の第2曲は、メヌエット風の優雅な音楽で、実に素朴な旋律が使われているのだが、ソリがまた何とも美しく、豊かな情感が伝わってくる。和音の移り変わりの美しさも、この曲に独特の味わいをつけ加えている。

●**ピアノ・ソナタ 第18番 変ホ長調、Op.31-3**(ベートーヴェン)

1804年に作曲されたベートーヴェン中期の作品である。作品31は、有名な《テンペスト》を含む3曲のソナタ集であるが、第16番と第17番《テンペスト》が1802年に作曲されているのに対し、このソナタはその2年後に書かれており、また前の2曲とは出版された時期も異なっている。どういう事情から、これら3曲が作品31のグループとしてまとめられたか不明である。

作品の知名度からいうと、《テンペスト》のほうはずっと有名であるが、作品のできからいうと、この変ホ長調ソナタのほうは、より緻密な完成度を示しているといえるだろう。

またこのソナタの演奏効果は、決して華やかなものではないが、当時、様々な改良が加えつづけられていたピアノの機能を、可能な限り追求し、表現して行くというベートーヴェンの基本的な姿勢が、このソナタにも貫かれており、それが新しい試みという形で作品の中に現われている。つまりこのソナタと同じ年に、しかし少し遅れて作曲された《ワルトシュタイン》や、そしてその翌年に作曲された《熱情》への踏み台として、このソナタの中には、大いなる飛躍の前の充実が宿っているのである。

形態的な特徴は、まずこのソナタが四つの楽章からなっていることである。しかも緩徐楽章がなく、スケルツォ楽章とメヌエット楽章を並置している。楽想は明るく、生き生きとして引き締まっており、初期のソナタには見られないピアノスティックな美感和造型を持っている。

第1楽章：アレグロ 変ホ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子、ソナタ形式。

第2楽章：スケルツォ（アレグロ・ヴィヴァーチェ）変イ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子。スケルツォと明示されているが3拍子ではなく、トリオを持つ3部形式もとらず、2拍子でソナタ形式

である点が異例。

第3楽章：メヌエット（モデラート・エ・グラツィオーソ）変ホ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子。もともとメヌエット楽章の代わりにスケルツォ楽章が取り入れられたという経緯にもかかわらず、このソナタでは二つが共存する。

第4楽章：プレスト・コン・フォーコ 変ホ長調、 $\frac{6}{8}$ 拍子、ソナタ形式。

なお別記のように、ここでは第3楽章までしか演奏されていない。

●幻想小曲集、Op.12より（シューマン）

シューマンはロマン派作曲家の中でも最もロマンティックな作曲家の一人といわれるが、それは彼の作品に強い文学性が窺えることにもよるだろう。ピアノ曲にしてみても、標題を持った組曲形式の名作が多いことから判る。

《幻想小曲集》も、そうした小曲からなる作品と同種類の名作で、全部で8曲からなるが、小曲とはいっても、しかし作品99の《色とりどりの小品》や作品124の《アルバムプレッター》のように短くはなく、また作品2の《蝶々》や作品9の《謝肉祭》のように、つづけて演奏されるべきというものでもない。8曲

には、それぞれに詩的な標題が与えられている、互いに情緒の上では関連を保っているため、有機的な一つの曲集として統一されているといえるが、個々に取り出して演奏することも十分に可能である。いずれも曲集名の通り、まさしくファンタジーにあふれた、そしていかにもシューマンらしいロマン性に満ちた小曲だが、ここでは以下の2曲が演奏されている。

第1曲：夕べに きわめて内面的に演奏すること 変ニ長調、 $\frac{3}{8}$ 拍子、ABABコーダの形式。

第3曲：何故に？ ゆるやかに繊細に 変ニ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子、自由な3部形式とも見られるが、《トロイメライ》と同様の同じ音型を繰り返すだけの自由な形式といえよう。

●ヴィルヘルム・バックハウスとその最後の演奏会について

今世紀の最も偉大なピアニストの一人で、特にドイツのピアノ音楽の、最もドイツ的な演奏者として高く評価されたヴィルヘルム・バックハウスは、1884年3月26日にライプツィヒで生まれた。幼い頃から母親にピアノの手ほどきを受け、やがてアロイス・レッケンドルフの指導を受けるようになった彼は、7

歳でライプツィヒ音楽院に入学し、同じくレッケンドルフに師事した。そして修行中の1897年の秋、当時の大ピアニストであるオイゲン・ダルベールがバックハウスの演奏を聴き、その才能を高く評価したことから、バックハウスはフランクフルトに移ってダルベールに師事した。ダルベールは当時、まったく弟子をとっていなかったのだが、バックハウスだけは例外的に弟子にとり、定評のあったベートーヴェン解釈、そしてピアノ演奏のテクニックなどを伝授したのである。

そして1900年、バックハウスは16歳という若さでロンドンにデビューし、異例の成功を収めたところから活躍が始まった。それ以来彼は、1905年から1912年までの間と1925年と翌年にかけて、マンチェスター王立音楽院、ゾンデルスハウゼン音楽院、カーティス音楽院で教鞭を執った以外、もっぱら演奏活動に専念した。その姿勢は厳しく、1926年以降は二度と教職に就かなかただけでなく、多くの偉大なピアニストが行なったような楽譜の校訂や著作に手を出さず、また弟子もとらず、作曲や指揮もしなかったし、演奏する曲目、すなわちレパートリーもその時々を追求することはなかった。さらに私生活では酒も煙

草も嗜まず、まさしくピアノ演奏を一筋に生きたのである。

そのバックハウスは、若い頃は『鍵盤の獅子王』と呼ばれた技巧派で、いかなる難曲もさらりと弾いてしまうほどで、それが逆に冷たい演奏という印象を与えてもいたようである。いかにもピアニスティックなショパンの作品を弾いていたのもその頃だったが、やがて外面的な美を追求することをやめて、完璧なまでのテクニックを、作曲家の精神あるいは作品の本質に徹底的に迫る姿勢に奉仕させる方向に変わって行き、素朴で武骨な、いかにも男性的な演奏を聴かせるようになって行った。しかし、その表現は威厳のある風格と巨大なスケールを備え、同時に優しさをも感じさせるもので、特にベートーヴェンやシューベルト、シューマン、ブラームスなどのドイツ音楽には、独特の味わいがあった。それこそドイツの伝統に根ざした深い精神性といえるかも知れない。

そうしたピアノ一筋の厳しい演奏活動を、ほぼ70年にわたって展開してきたバックハウスは、1969年7月5日に85歳の生涯を閉じたのである。彼はその年の6月26日と28日の両日にわたって、オーストリアのアルプス山麓

にあるケルンテン高地オシアッハ湖畔のシュティフト教会でリサイタルを開いたのだが、2日目の28日のコンサート途中で心臓発作を起こしたのである。それでもバックハウスは、後半のプログラムを変更して、とにかくコンサートを終えた。それから1週間後に、彼は帰らぬ人となってしまった。この6月のコンサートは、この年に始められた「ケルンテンの夏」という音楽祭のこけら落としともいべきものだったが、音楽祭最初のコンサートはしかし、バックハウス最後の演奏会となってしまったのである。ここにはその2日間のコンサートの模様が収録されている。

第1日目の6月26日は、ベートーヴェンの《ワルトシュタイン》、シューベルトの《楽興の時》、モーツァルトの《トルコ行進曲つき》、そしておそらくアンコールであろうシューベルトの即興曲作品142の第2曲が、無事に演奏された。その演奏には、かつて「無類のテクニシャンだが、冷たい」と評されたバックハウスの姿はなく、老熟しきって枯淡の境地を拓いたといえる好々爺の暖かい表情がある。その音には、まったく力みがなく、確かに細かいミス・タッチは散見されるものの、それがまったく気にとまらない音楽の豊かさ

がある。それは巧いとか下手とかいった言葉を越えた、いわば無我の境地、あるいは音楽もしくは人間への愛と祈りといったものとすら感じられる。まさに自我を忘れ去って、ピアノと無心に戯れている風情である。

そして2日目の6月28日のコンサートは、

まずベートーヴェンのソナタ第18番で始められた。それは、前々日と同じような、まさしく抜け切ったような演奏となっている。

ここに聴かれるバックハウスの演奏は、まさに「肉体を超越した精神の勝利の歌」といべきものだろう。 [福本 健]

■ユニバーサル ミュージック機器サイトへのアクセス方法

- iモ-カをご利用の方 i Menu⇒メニューリスト⇒音楽/映画/芸能⇒音楽情報⇒ユニバーサル ミュージック
- EZwebをご利用の方 EZトップメニュー⇒EZインターネット⇒エンターテイメント⇒音楽⇒ユニバーサル ミュージック
- ポータルサイトをご利用の方 メニューリスト⇒エンタメ・芸能⇒映画・音楽⇒ユニバーサル ミュージック
- ユニバーサル ミュージックのホームページ <http://www.universal-music.co.jp/>

取扱い上のご注意 ●ディスクは両面とも、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に乾かすように拭き取ってください。●ディスクは両面とも、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないでください。●ひび割れや変形、または接着剤等で修繕したディスクは、危険ですから絶対に使用しないでください。●保管上のご注意 ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないでください。●ディスクは使用後、もとのケースに入れて保管してください。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落したりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。